



台湾の高齢者事情

いしかわ あきひろ
石川 晃弘

東呉大学(台北)・客員教授

筆者は中央大学を定年退職したあと、台北の私立大学に身を置いている。自分が年寄りなので、この国では高齢者はどんな暮らしをしているかが気になって、まずは様子を窺いに街に出た。郊外の観光地でも市内の夜市でも、電車やバスのなかでも、高齢者はほとんど見かけない。だいたい若者たちでいっぱいである。

では高齢者はどこでなにをしているのだろうか。よくよく見たら、彼らは必ずしも家にこもってはいなかった。この国の人たちは健康志向が強く、平日の早朝や夜の公園ではグループを組んで気功体操やダンス、両者を合わせて開発された「元極舞」を、黙々と、あるいは曲にあわせておこなっている。休日には国立公園にハイキングに出かける。麻雀やトランプも盛んである。高齢者の余暇活動は一見じつに活発である。

各地区には公有民営の高齢者サービスセンターがあり、そこも高齢者たちの社交と余暇活動の場になっている。私が訪れた台北市南港区のセンターでは、高齢者対象の書道、絵画、一般歌唱、日本歌唱、英語、ヨガ、ダンス、パソコンなどの学習コースが設けられていて、遠足やパーティの準備と実施には60人もの高齢者がボランティアと

してかかわっている。また、地区内に住む独居老人にたいして、直接訪ねたり電話で話し相手になったりして社会につなぎとめる役も、これらのボランティアがおこなっている。そこには高齢者が自分たちの社会をみずから組織し運営している姿がある。

もっとも、ひとくちに高齢者といっても、その暮らし方はひとそれぞれである。社会学者の陳君山氏が2年前に台北北部の士林区で行った調査によると、高齢者の生活志向において4つのタイプが浮かび上がった。

家族志向(台湾社会はキャリア競争が熾烈であり、その渦中にあるわが子をすこしでもサポートしようと、孫の面倒をみているタイプ)

自己実現志向(これまでの人生でやりたいと思っていたことを自由の身になったいま実現して夢をかなえようと、写真、書道、旅行、コミュニケーションレヅジ通い、市民運動などに精を出すタイプ、とくに男性)

社交志向(会食したりおしゃべりしたりして気のあう友人との付き合いで時間を過ごすタイプ、特に女性)

逃避志向(人生脱落者意識に囚われ、他者と



のつながりに無関心となって自分の殻に閉じこもるとか、宗教にのめりこむとかするタイプ) いずれのタイプに属するにせよ、土台となるのは高齢者の生活保障である。私は台湾では「孝」の価値規範が人々の間に深く根ざしていて、親の面倒は子どもがみるものと思っていた。ところがそれはもう昔の話になってしまっているようだ。都会に出てきてそこに生活の根拠を据えた子どもたちは、もう田舎に残した親の生活を助けるどころではなくなった。田舎でも都会でも独居老人が増えている。街では高齢者の活発な余暇活動がみられる一方で、老人の自殺が着実に増えている。65歳以上人口10万人当りの自殺者数は、2001年には37.6人だったが、2006年には39.3人になった。さきに述べたセンターの設置とそのサービス活動の展開の背景には、じつはこうした事情があったのだ。

さらにまた、年金制度の整備と拡充もおこなわれるようになった。その筋の専門家、盧政春氏の話では、従来は軍人、公務員、国立大学教員、大企業長期勤続者は定年退職のさいに巨額の退職金をもらうか、一部を退職金としてもらって残りの

分を年金のようにして定期的に受け取るかの、どちらかを選択することになっていた。私立大学の教職員は退職一時金をもらうだけで、年金はいまでもない。一般の雇用者にかんしてはつい最近になって新しい社会保険制度ができ、そのなかに老齢年金が組み込まれるようになり、退職一時金の対象範囲も拡大されて中小企業で働く短期雇用者にも適用されるようになった。自営業者などを対象とした国民年金制度もやっと発足する。数年前から65歳以上の一般高齢者は毎月3000元(日本円で約1万円、ちなみに台湾の物価は日本の半分以下)を支給されている。原住民は55歳でこれを貰えるようになった。

公共交通手段や公共施設の利用においても、高齢者優遇措置が講じられている。台北市では65歳以上は市内バス無料、地下鉄6割引、市営博物館等無料で、高速バス、都市間バス、国内航空、国立博物館等は半額料金である。

ここ数年、台湾では年金だけでなく高齢者福祉一般に公共的措置が取られるようになった。こうして台湾は高齢化に対応して「孝」社会から「公」社会へと移行しつつあるようだ。